

国立大学法人 帯広畜産大学 2021概要

令和3年度



学長挨拶

帯広畜産大学は、昭和16年に創立した帯広高等獣医学校を原点とし、昭和24年に「農業に関する科学技術を研究・教育することによって、農業が合理的に発展することに努め、産業経済の興隆に貢献すること」を目的として設置されました。本学は「日本の食料基地」として食料の生産から消費まで一貫した環境が揃う北海道十勝地域において、生命、食料、環境をテーマに「農学」「畜産科学」「獣医学」に関する実学に基づいた教育研究を推進して参りました。

令和4年4月には、本学と小樽商科大学、北見工業大学が経営統合して、新法人「国立大学法人北海道国立大学機構」が創設されます。新法人が三大学を運営する体制の下で、新たな教育システムの開発による人材育成や産学官連携体制の構築により、農学・商学・工学の三分野が連携し、北海道経済・産業の発展に貢献して参ります。これらの新法人による新たな取り組みとともに、本学独自の特色ある教育研究機能の充実にも、これまで以上に取り組んで参ります。

本学は、我が国唯一の国立農学系単科大学として、「知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、『食を支え、くらしを守る』人材の育成を通じて、地域および国際社会に貢献する」ことをミッションに掲げています。ミッション達成のため、共同獣医学課程では、動物の疾病の診断と予防技術に実践的に対応する臨床獣医学分野及び人獣共通感染症をはじめとした公衆衛生学分野に貢献できる獣医師を養成しています。また、畜産科学課程では、「農場から食卓まで」をスローガンとし、食品衛生も含めた農畜産の幅広い分野で活躍する専門職業人を養成しています。更に、獣医・農畜産融合の教育研究と国際通用力を持つ人材育成を学部だけでなく大学院でも展開しています。

地域の試験研究機関や農業・食品・動物関連企業、動物衛生や食品安全を担う国際機関、途上国に対する国際協力機関等とも連携し、社会の要請に即した農学系人材「グローバル人材」を輩出するため、以下の4つのビジョンを掲げ、実践しています。



帯広畜産大学長 奥田 潔



4つのビジョン

1 欧米水準の教育課程の構築

共同獣医学課程において国際通用力を有する獣医師を養成するため、欧州獣医学教育認証を取得し、欧州レベルの高度な獣医学教育を提供しています。

2 世界トップレベル大学等との国際共同研究及び教育交流

米国コーネル大学、米国ウィスコンシン大学との学術交流協定に基づき、招へい講義・サマープログラムの実施や、世界トップクラス大学に大学院生を派遣し国際共同研究への参画を推進しています。また、獣医・農畜産分野の世界レベルの研究実績による国際研究協力を強化し、研究水準の向上と、関連分野の発展に貢献しています。

3 国際安全衛生基準適応の実習環境による人材育成

国際安全衛生基準の取得・維持に対応できる人材を育成するため、大学院畜産科学専攻博士後期課程の畜産衛生学位プログラムにおいて、国際基準適応の施設を活用した食品安全マネジメント教育プログラムを実施し、HACCP専門家資格を付与しています。

4 企業等社会のニーズに即した共同研究・人材育成

大学院畜産学研究科において、企業との共同研究等に基づく研究テーマを増やし、企業等の社会のニーズに即した人材を育成しています。

INDEX

学長挨拶

- 1 沿革
- 2 歴代校長・学長
- 3 機構図
- 4 役職員
- 5 大学教育センター
- 5 畜産学部
- 7 大学院
- 9 別科
- 9 獣医学教育国際認証推進室
- 10 グローバルアグロメディシン研究センター
- 11 原虫病研究センター
- 12 産学連携センター
- 13 畜産フィールド科学センター
- 14 動物医療センター
- 15 動物・食品検査診断センター
- 16 附属図書館
- 16 保健管理センター
- 17 イングリッシュ・リソース・センター
- 17 農学情報基盤センター
- 17 大学情報分析室
- 17 実験動物施設管理室
- 18 国際活動
- 21 社会貢献

資料編

- 25 職員数
- 25 学生の定員・現員
- 27 外国人留学生
- 28 国際交流協定締結大学
- 29 入学者数
- 30 卒業者及び修了者数・就職状況
- 32 学生寮・国際交流会館・福利厚生施設
- 32 学生支援(奨学金)
- 33 令和3年度収入・支出予算(支出区分別)
- 33 科学研究費補助金等
- 34 財団等からの受入れ状況
- 34 外部資金受入額
- 34 校地及び建物
- 35 案内図
- 36 配置図

沿革

昭和

- 16. 4. 1 帯広高等獣医学校創立
- 19. 4. 1 帯広獣医畜産専門学校と改称
- 21. 4. 1 帯広農業専門学校と改称
- 24. 5. 31 帯広畜産大学設置(学科を獣医学科・酪農学科とし,帯広農業専門学校を包括)
- 24. 5. 31 附属農場,附属図書館設置
- 28. 4. 1 総合農学科設置
- 28. 8. 1 附属家畜病院設置
- 35. 4. 1 別科(草地畜産専修)設置
- 36. 4. 1 農産化学科設置
- 38. 4. 1 農業工学科設置
- 39. 4. 1 草地学科設置
- 41. 3. 31 総合農学科廃止
- 42. 6. 1 帯広畜産大学大学院畜産学研究科修士課程設置(獣医学専攻・酪農学専攻・農産化学専攻)
- 44. 4. 1 大学院畜産学研究科に農業工学専攻・草地学専攻(いずれも修士課程)を設置
- 44. 4. 1 保健管理センター設置
- 47. 4. 1 畜産経営学科設置
- 49. 4. 1 畜産環境学科設置
- 50. 9. 2 放射性同位元素実験室設置
- 51. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産経営学専攻(修士課程)を設置
- 53. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産環境学専攻(修士課程)を設置
- 53. 4. 1 酪農学科を家畜生産科学科に改組
- 57. 4. 1 大学院畜産学研究科の酪農学専攻(修士課程)を家畜生産科学専攻(修士課程)に改組

平成

- 2. 4. 1 家畜生産科学科,農産化学科,農業工学科,草地学科,畜産経営学科,畜産環境学科を畜産管理学科,畜産環境科学科,生物資源化学科に改組
- 2. 4. 1 大学院畜産学研究科の獣医学専攻(修士課程)を廃止
- 2. 4. 1 岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程に構成大学として参加
- 2. 6. 8 原虫病分子免疫研究センター設置
- 4. 2. 1 情報処理センター設置
- 6. 4. 1 岩手大学大学院連合農学研究科博士課程に構成大学として参加
- 6. 4. 1 大学院畜産学研究科の家畜生産科学専攻,農産化学専攻,草地学専攻,農業工学専攻,畜産経営学専攻及び畜産環境学専攻(いずれも修士課程)を畜産管理学専攻,畜産環境科学専攻,生物資源化学専攻(いずれも修士課程)に改組
- 8. 5. 11 地域共同研究センター設置
- 9. 4. 1 生物資源化学科を生物資源科学科に改組
- 12. 4. 1 原虫病分子免疫研究センターを廃止し,原虫病研究センターを設置
- 13. 4. 1 大学院畜産学研究科の生物資源化学専攻(修士課程)を生物資源科学専攻に改称
- 14. 4. 1 学部教育センター設置
- 14. 4. 1 畜産管理学科,畜産環境科学科,生物資源科学科を畜産科学科に改組
- 14. 4. 1 附属農場を廃止し,畜産フィールド科学センターを設置

平成

- 14. 8. 1 大動物特殊疾病研究センター設置
- 16. 4. 1 国立大学法人帯広畜産大学設置
- 16. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産衛生学専攻(独立専攻)(修士課程)設置
- 16. 4. 1 学部教育センターを大学教育センターに改称
- 18. 4. 1 大学院畜産学研究科に畜産衛生学専攻(博士後期課程)設置
- 20. 4. 1 獣医学科,畜産科学科を獣医学課程,畜産科学課程に改組
- 21. 4. 1 附属家畜病院を動物医療センターに改称
- 21. 4. 1 イングリッシュ・リソース・センター設置
- 22. 4. 1 大学院畜産学研究科の畜産管理学専攻,畜産環境科学専攻,生物資源科学専攻(いずれも修士課程)を畜産生命科学専攻,食品科学専攻,資源環境農学専攻に改組
- 22. 4. 1 地域共同研究センターを地域連携推進センターに改組
- 22. 4. 1 大動物特殊疾病研究センターを動物・食品衛生研究センターに改組
- 24. 4. 1 帯広畜産大学畜産学部と北海道大学獣医学部との「共同獣医学課程」を設置
- 26. 4. 1 動物・食品衛生研究センターを動物・食品検査診断センターに改組
- 27. 4. 1 大学情報分析室設置
- 27. 4. 1 グローバルアグロメディシン研究センター設置
- 28.11.16 共用機器基盤センター設置
- 30. 4. 1 大学院畜産学研究科の畜産生命科学専攻,食品科学専攻,資源環境農学専攻(いずれも修士課程)及び畜産衛生学専攻(博士前期課程・博士後期課程)を廃止
- 30. 4. 1 畜産科学専攻(博士前期課程・博士後期課程)及び獣医学専攻(博士課程)を設置
- 30. 4. 1 岩手大学大学院連合農学研究科博士課程の構成大学から離脱
- 30. 4. 1 岐阜大学大学院連合獣医学研究科博士課程の解消
- 31. 4. 1 地域連携推進センターを産学連携センターに改組
- 31. 4. 1 共用機器基盤センターを廃止し,産学連携センターに機能を集約

令和

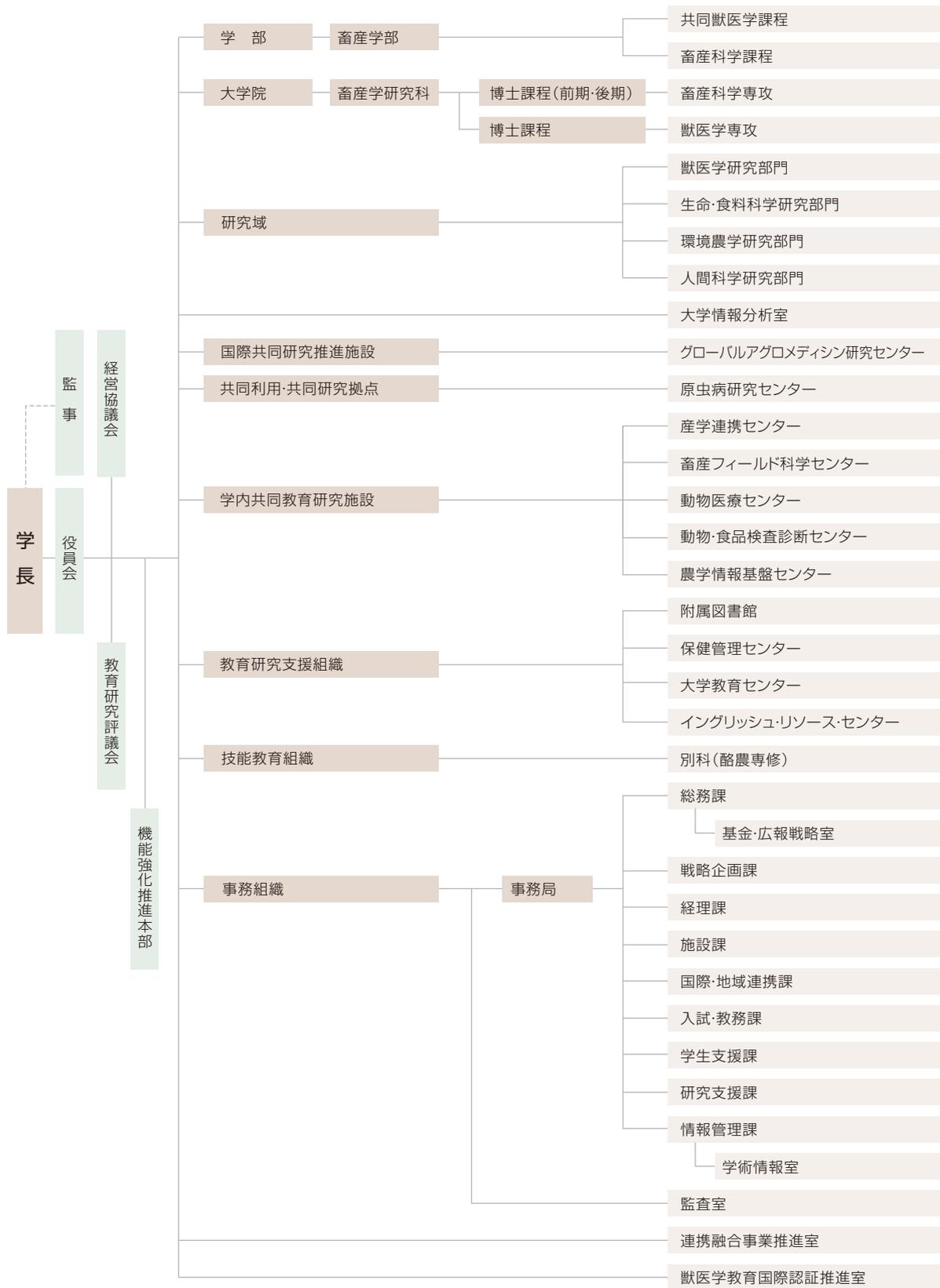
- 2. 4. 1 別科(草地畜産専修)を別科(酪農専修)に改組
- 2.10. 1 情報処理センターを農学情報基盤センターに改組

歴代校長・学長

名称	氏名	就任年月日
帯広高等獣医学校	宮 脇 富	昭和16. 4. 1
帯広獣医畜産専門学校	宮 脇 富	昭和19. 4. 1
帯広農業専門学校	宮 脇 富	昭和21. 4. 1
帯広畜産大学	宮 脇 富	昭和24. 5.31
	小華和 忠 士	昭和28. 9. 1
	田 所 哲太郎	昭和33. 1.10
	山 極 三 郎	昭和37. 1.10
	大 原 久 友	昭和45. 3. 1

名称	氏名	就任年月日
帯広畜産大学	西 川 義 正	昭和51. 3. 1
	鈴 木 省 三	昭和59. 3. 1
	坂 村 貞 雄	平成 2. 3. 1
	久 保 嘉 治	平成 8. 3. 1
	佐々木 康 之	平成12. 3. 1
国立大学法人 帯広畜産大学	鈴 木 直 義	平成14. 1. 1
	鈴 木 直 義	平成16. 4. 1
	長 澤 秀 行	平成20. 1. 1
	奥 田 潔	平成28. 1. 1

機構図



役職員

学長	奥田 潔
理事・副学長	福島 道広
理事・副学長	井上 昇
理事(非常勤)	門屋 充郎
監事(非常勤)	山本 眞樹夫
監事(非常勤)	白田 佳子
副学長	柳川 久
副学長	古林 与志安
副学長	藤波 豊彦
副理事	石井 利明
副理事	加藤 清明
副理事	小池 正徳
副理事	耕野 拓一
副理事	仙北谷 康
学長補佐	中野 昌明
顧問	長澤 秀行
顧問	竹川 博之

経営協議会(外部委員)

IPU環太平洋大学教授 お茶の水女子大学名誉教授	内田 伸子
社会福祉法人大寿庵理事長	大社 啓二
国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 本部 企画戦略本部 研究統括部 スマート農業事業推進室長	栗原 光規
三菱商事株式会社北海道支社長	内村 雄介
東京海洋大学顧問	高井 陸雄
帯広市長	米沢 則寿
公益財団法人柳月財団監事	渡邊 純夫

部門長・別科主任

獣医学研究部門長	小川 晴子
生命・食料科学研究部門長	手塚 雅文
環境農学研究部門長	加藤 清明
人間科学研究部門長	渡邊 芳之
別科主任	松井 基純

専攻長

畜産科学専攻長	手塚 雅文
獣医学専攻長	玄 学南

センター長等

グローバルアグロメディシン研究センター長	金山 紀久
原虫病研究センター長	河津 信一郎
産学連携センター長	大庭 潔
畜産フィールド科学センター長	小池 正徳
動物医療センター長	南保 泰雄
動物・食品検査診断センター長	石井 利明
農学情報基盤センター長	佐藤 禎稔
附属図書館長	柳川 久
保健管理センター長	川畑 秀伸
大学教育センター長	福島 道広
イングリッシュ・リソース・センター長	Marshall Smith
大学情報分析室長	井上 昇
獣医学教育国際認証推進室長	古林 与志安

事務局

事務局長	藤波 豊彦
事務局次長(兼)経理課長(兼)施設課長	佐々木 津祥
事務局次長(兼)戦略企画課長	道見 康文
総務課長	山本 涉
国際・地域連携課長	舩川 正晃
入試・教務課長	高見 守亮
学生支援課長	佐藤 健一
研究支援課長	大橋 穰
情報管理課長	大坪 秀典
情報管理課 学術情報室長	大平 依理子
監査室長	大林 姿子

大学教育センター

本学では、入試に関することから学部・別科の教育及び大学院教育の企画運営、学生への修学支援、生活支援などを一括して担うための組織として大学教育センターが設置されています。

大学教育センターは、入学者の選抜に関することを行う「入試部」、その下で入試広報や選抜方法について検討を行う「入試広報室」「入学選抜方法研究室」、学部と別科の教育及び生活支援を行う「学部教育部」、大学院の教育及び生活支援を行う「大学院教育部」、学生に対する支援の内容や目的に応じた「教育支援室」「学生相談室」「就職支援室」「学生・課外活動支援室」「留学生支援室」「特別修学支援室」で構成され、教育担当理事がセンター長を務めます。

畜産学部

○アドバンス制教育システム

本学の教育課程である「アドバンス制」とは、「基盤教育」「共通教育」「展開教育」の3つの教育分野から成ります。下級学年では大学で学ぶための基礎となる幅広い知識や技術、農畜産全般の基礎知識を中心とした学習(基盤教育・共通教育)を行い、専門教育への意欲と方向性を育成します。その上で、上級学年に進むにつれて獣医農畜産の特定分野の深い専門知識・技術の学習(展開教育)へと前進(アドバンス)していく教育課程です。特に畜産科学課程では、入学時に上級学年で学習する専門分野を決定せず、農畜産の様々な分野についての基礎知識を学習し理解を進めながら、自主的な判断でそれぞれの学が専門分野を選択していくという方式をとっています。



羊の実習(家畜改良センター十勝牧場にて)

入学

卒業

農畜産全般の
基礎知識を中心とした学習

特定分野の深い
専門知識・技術の学習

基盤教育

基盤教育は、広義の教養教育であり、入学生の学習行動を高校教育から大学教育に転換し、大学で学ぶための基盤を形成すると共に、社会人、職業人として生きるために必要な力を育成すること(人格教育)を目的としています。

共通教育

共通教育は、課程や専門にかかわらず必要な幅広い農畜産の基礎知識や体験を学生に提供する中で、学生の目的意識や職業意識を育て、専門知識及び技術の主体的な選択と学習へ誘導することを目的としています。

展開教育

展開教育では、学生の目的意識や進路に応じた、現場に密着した多様な専門職業教育を提供します。展開教育の開講期は、主に4期(2年後期)以降です。展開教育には、共同獣医学課程1ユニット、畜産科学課程6ユニットの「教育ユニット」を設定しています。畜産科学課程では学生が自分の進路や興味に合わせて、所属する教育ユニットを選択する方法をとっています。

○全学農畜産実習・演習の概要

全学農畜産実習(共同獣医学課程では農畜産演習)は、「Farm to Table」に対応した広い視野の知識を提供するため、平成26年度入学者から全学農畜産実習と連動した「農畜産科学概論I～VI」を必修科目として開設し充実を図りました。また、これらの科目は本学新入生(共同獣医学課程・畜産科学課程)が全員参加するカリキュラムとなっており、実際に「作物栽培」「乳肉食品生産」「家畜管理」を通して「生命を育み生命を食す」ことの大切さ、難しさなどを体験します。これに参加することで農畜産の知識と体験を得て、専門職業人としての必要な見識を培うことができます。



豚の飼育実習



ジャガイモの収穫実習



作付け実習

共同獣医学課程

平成24年度入学者から本学と北海道大学は、共同獣医学課程を編成し、それぞれの優れた教育施設、教育資源を相互に利用して北海道というフィールドを生かした実践的かつ先進的な獣医学教育を行っており、令和元年12月にはEAEVE(欧州獣医学教育機関協会)の認証を取得し、本教育が世界水準にあり、国際通用性を有することが証明されました。



画像診断実習



基礎獣医学演習交流会

獣医学ユニット

1. 獣医師としての任務を遂行するための論理性及び倫理性に裏打ちされた行動規範を身につけるための教育を実施します。
2. 動物疾病の予防・診断・治療、動物の健康の維持増進、公衆衛生等に関する卓越した知識・技術を身につけるための教育を実施します。
3. 安定的な食料供給、家畜及び畜産物の安全確保、人獣共通感染症対策など地球規模の課題の解決に貢献するための国際的視点と知識・技術を身につけるための教育を実施します。
4. 最先端の生命科学研究に触れ、生命現象の新たな発見や医薬品の開発などにおいて獣医学を基礎とした課題解決能力と国際的な活動を実践する能力を身につけるための教育を実施します。

畜産科学課程

畜産科学課程は、獣医・農畜産融合の視点から、農場から食卓まで生命・食料・環境を科学し、農畜産の幅広い分野で活躍する専門職業人の育成を目的としています。

家畜生産科学ユニット

家畜の飼養管理、繁殖や改良、乳肉の生産についての知識と技術を修得するための教育を実施します。

農業環境工学ユニット

農業農村工学や農業システム工学に基づく先進的農業と環境保全を両立させるために必要な技術体系を学ぶための教育を実施します。

環境生態学ユニット

多様な生物群からなる生態系の仕組みを学ぶための教育科目及び農畜産環境とその周囲を取り巻く自然環境を理解するための教育を実施します。

植物生産科学ユニット

植物生産を支える土壌と病害虫を含めた栽培環境から、その環境で育つ作物の生理、生態及び育種を総合的に理解するための教育を実施します。

食品科学ユニット

食品の一次機能(栄養成分とエネルギー)、二次機能(おいしさや食感)及び三次機能(生体調節や健康)を学ぶための教育を実施します。

農業経済学ユニット

農畜産の生産、加工、流通、消費に関わる諸問題を、経済学や経営学を主とする社会科学的なものの見方や調査に基づき的確に把握するための教育を実施します。



講義の様子

大学院

より先端的な学術知識の育成、高度専門職業人としての技術の修得のために大学院教育があります。大学院畜産学研究科に、畜産科学分野の畜産科学専攻博士前期課程及び博士後期課程、獣医学分野の獣医学専攻博士課程が設置されています。また、畜産科学専攻には獣医・農畜産融合分野の学位を取得するための「畜産衛生学位プログラム」が設置されています。

畜産学研究科畜産科学専攻(博士前期課程,博士後期課程)

動物医科学、家畜生産科学、環境生態学、食品科学、農業経済学、農業環境工学、植物生産科学等の農畜産科学分野及びその学際分野における最新の知識と技術を駆使して、獣医・農畜産融合の視点から、食の安全確保をはじめとするグローバル化した多様な農畜産に関する課題の解決に取り組むことができる、高度専門職業人、教育者及び研究者を養成します。

博士前期課程

学部畜産科学課程の専門教育プログラムである6ユニットに対応した6コースを配置することにより学部教育との接続を円滑に行くと共に、コース横断型の教育科目を充実することで、農場から食卓までの「食の安全確保」をはじめとする農畜産学に関する課題解決能力と幅広い見識を備えた人材を育成します。また、学部畜産科学課程の教育ユニットにはない、獣医学に基礎を置く「動物医科学コース」を配置し、獣医・農畜産融合分野の教育体制を充実させています。

動物医科学コース ⇒ 学位:修士(動物医科学)

獣医師養成以外の学士課程を卒業した学生を対象に、動物医科学に関する知識と技術を提供することにより、動物に関する様々な知識を社会に還元できる人材を養成します。

家畜生産科学コース ⇒ 学位:修士(農学)

家畜をはじめとする動物の生体機能、育種、繁殖、栄養、管理等に関する広範かつ体系的な知識と技術を提供することにより、畜産・生命科学分野の様々な問題に対応できる人材を養成します。

環境生態学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農畜産環境とそれを取り巻く自然環境に関する広範かつ体系的な知識と技術を提供することにより、環境の保全、管理、利用に関する様々な問題に対応できる人材を養成します。

食品科学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農畜産物を原料とした食品の製造・加工及びその機能性・安全性に関する広範かつ最新の知見や技術を提供することにより、食品業界をはじめとしてバイオ産業においても活躍できる人材を養成します。

農業経済学コース ⇒ 学位:修士(農学)

農業経済を中心とする社会科学的視点から俯瞰できるような専門教育を提供することにより、フードシステムにおける特定課題の解決に向けた実践的方策を提示することができる人材を養成します。

農業環境工学コース ⇒ 学位:修士(農学)

理論と実践に基づく先進的な農業生産技術と環境保全を両立させるための技術体系に関する専門教育を提供することにより、農業農村工学分野や農業機械システム学分野で活躍できる人材を養成します。

植物生産科学コース ⇒ 学位:修士(農学)

作物生産を支える土壌管理から畑作物と飼料作物の育種と栽培、病害虫管理及び草地利用までに関する知識と技術を提供することにより、農畜産業の基盤づくりを担うことができる人材を養成します。



3Dプリンタによる実験装置の製造

博士後期課程 ⇒ 学位:博士(農学)

家畜生産科学、環境生態学、食品科学、農業経済学、農業環境工学、植物生産科学、畜産衛生学の農畜産学分野に関する「獣医・農畜産学融合」教育を提供し、食と農のグローバル化を背景にした専門的知識及び創造性と、優れた研究開発能力及び教育能力を備えた教育者・研究者を養成します。

畜産衛生学位プログラム ⇒ 学位:修士(畜産衛生学)／博士(畜産衛生学)

本プログラムは、農作物・食品等の国境を越えた流通拡大を背景として企業等に求められている国際安全衛生基準の取得・維持に対応できる人材を育成するため、本学が実践してきた「食の安全確保」に関する高度な専門教育を、所属するコースに限定されることなく畜産科学専攻の全ての学生が履修可能な学位プログラムです。本プログラムでは、農畜産物をはじめとする食の安全衛生に関するマネジメントシステム等の専門教育を提供することにより、優れた実践力及び応用力を身につけた畜産衛生の専門家を養成し、その専門性に相応しい「修士(畜産衛生学)」又は「博士(畜産衛生学)」の学位を付与します。

畜産学研究科獣医学専攻(博士課程)

博士課程⇒ 学位:博士(獣医学)

基礎獣医学, 病態獣医学, 応用獣医学, 臨床獣医学等の獣医学分野における最新の知識と技術を駆使した先端研究を担うことができる人材や, 伴侶動物, 産業動物及び野生動物を対象として高度な最先端医療を推進する臨床獣医師など, 獣医科学と農畜産科学を融合した柔軟な発想で, 農畜産業のグローバル化に伴う多様な社会ニーズに対応できる実践力とリーダーシップを発揮する能力を身につけ, 食の安全や動物とヒトの健康の向上に貢献できる指導的な教育者・研究者を養成しています。

別科

現在の酪農界では,ウシを健康に飼い適切に乳生産を行うという酪農の基本技術だけではなく,多様な経営形態にも対応できる人材が必要とされています。そこで,別科では,【酪農に関わる基本的知識と技能を備え,食と農の大切さを基礎として「農場から食卓まで」の幅広い視点で酪農に適應できる知識と実践力を有し,国際的視野で地域の酪農を担い,日本の酪農産業をリードできる人材を育成する。】ことを教育目標としています。本学学部教員と乳牛と肉牛で約170頭を飼養している畜産フィールド科学センター技術職員が連携して提供する,実務実習を主体とした,多様な酪農技術を連携させた教育プログラムを学ぶことのできる別科は,北海道・十勝の酪農に根付いたコースです。



実習の様子

獣医学教育国際認証推進室

平成25年4月,獣医学教育の改善を示す指標の一つとして,国際水準の獣医学教育の構築を目指し,欧米の獣医学教育認証を取得するために獣医学教育国際認証推進室を設置しました。

本推進室では,①獣医学教育認証評価組織及び認証取得大学の調査,②教育設備・カリキュラムの改善,③教育の質保証のための自己点検・評価,④自学自習用教育コンテンツの制作などの活動を中心となって行っています。

これらの活動により,令和元年に欧州獣医学教育認証を取得しました。しかし,認証取得は通過点に過ぎません。日々変化を続ける獣医学教育を取り巻く環境に適切に対応するため,今後も努力を続けていきます。

産業動物臨床施設群の活用

平成28年10月,CT・MRIなど高度な診療機器を備えた産業動物臨床棟や,動物福祉に配慮したスキルスラボや産業動物飼育棟などを新設しました。あわせて,臨床検査,病理検査及び毒性検査の実務や教育を行う動物・食品検査診断センター,病態診断棟などの周辺施設を有機的に結ぶ渡り廊下を整備することで獣医学教育における産業動物臨床拠点としての役割を担う産業動物臨床施設群が完成しました。

この施設群を効果的に活用した実習教育を行うことで,獣医学教育の質の向上を図っています。



完成した産業動物臨床施設群

EAEVE(欧州獣医学教育機関協会)の認証取得

本学と北海道大学による共同獣医学課程は,令和元年7月にEAEVEによる公式診断を受審し,同年12月獣医学教育認証を取得しました。

EAEVEはオーストリア・ウィーンに本部がある獣医学教育評価機関で,欧州の獣医学教育における質保証の基準及びガイドラインを策定すると共に,構成大学がそれらを遵守しているかを審査・評価する組織です。

EAEVEによる評価は,国際的機関による第三者評価と位置づけられるものであり,その認証は,実施する獣医学教育が欧州水準にあり,国際通用性を有することを意味します。

本課程は,今後も獣医学教育の更なる改善のため,認証取得の過程で得た経験と知識を他大学に還元し,我が国の獣医学教育の継続的な教育改革に貢献していきます。

グローバルアグロメディシン研究センター

本学は、日本で唯一の国立農学系単科大学として「世界トップレベル大学等との国際共同研究及び教育交流の推進」等、3つの戦略を柱とし、機能強化事業「食と動物の国際教育研究拠点の形成」を推進しています。本センターは、この本学の機能強化事業を牽引する中核的組織として平成27年4月に設置されました。

本センターの目的は、本学と海外の大学の研究者が結集して、獣医・農畜産融合の国際共同研究を推進し、食と動物に係る世界の諸課題の解決に貢献することです。センター内には「獣医学研究部門」及び「農畜産学研究部門」を配置し、両研究部門に本学の教員所属組織である「研究域」、「原虫病研究センター」、「動物・食品検査診断センター」等、多様な領域から多くの教員が国際共同研究に参画できる体制を構築しています。両研究部門では、獣医学・農畜産学分野の世界大学ランキングトップレベルにある米国コーネル大学及び米国ウィスコンシン大学との間で、食と動物に係る世界の諸課題の解決に向けて、多様な共同研究を展開し、成果をあげています。また、教育面では、両大学の優れた研究者による講義・セミナーを企画・実施し、さらに、米国で実施される教育プログラムに学生を派遣すると共に、ウィスコンシン大学とは、サマージョイントプログラム（ウィスコンシン大学スタディアブロード）と称して、日米両大学の学生が北海道の自然や食の生産から加工までを学ぶプログラムを実施し、学生が国際的な視野と感覚をもって学ぶことができる教育を推進しています。

※令和2年度のサマージョイントプログラムは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、中止しております。



コーネル大学研究者による講義の様子



ウィスコンシン大学での研究打合せの様子

帯広畜産大学研究組織

研究域 〈獣医学／生命・食料科学／環境農学／人間科学〉

原虫病研究センター 〈国際獣疫事務局(OIE)認定研究機関〉

動物・食品検査診断センター 〈食の安全を担う研究機関〉

担当教員が結集

グローバルアグロメディシン研究センター

■ 獣医・農畜産融合の国際共同研究を推進し、食と動物に係る世界の諸課題の解決に貢献

獣医学研究部門

農畜産学研究部門

■ 米国の優れた研究者の講義・セミナー
 ■ 米国教育プログラムへの学生派遣
 ■ サマージョイントプログラム

**コーネル大学
共同研究の推進**

学術交流協定締結
H25.12

**ウィスコンシン大学
共同研究の推進**

学術交流協定締結
H26.9

原虫病研究センター(共同利用・共同研究拠点)

我が国の獣医・畜産系大学で唯一の家畜原虫病に関する研究拠点として、大学並びに各省庁との研究連携により、人獣共通原虫病の制圧と動物生産性向上による蛋白質資源の確保に努め、世界人類の健康と福祉に学術的に貢献し得る原虫病に関する総合的研究を行います。平成 20～24 年度には原虫病研究センターを中核として日本学術振興会「グローバル COE プログラム」を、また、平成 26～31 年度には AMED/JICA SATREPS「モンゴルにおける家畜原虫病の疫学調査と社会実装可能な診断法の開発」を実施し、国際的な高度専門職業人の育成に貢献しました。現在も共同利用・共同研究拠点事業「マダニバイオバンク整備とベクター生物学の新展開」、JICA 草の根プロジェクト「ウガンダにおけるマダニとマダニ媒介感染症制御による畜産農家支援プログラム」等を実施して国内外の原虫病対策と次世代を担い世界をリードする国際的な高度専門職業人の育成に取り組んでいます。また、平成 19 年にスーラ(トリパノソーマ・エバンシ感染症)、ウマピロプラズマ病及びウシバベシア病の国際獣疫事務局(OIE)リファレンスラボラトリー、平成 20 年に「動物原虫病の監視と制圧」に関する OIE コラボレーティングセンター、平成 28 年度には試験所能力を国際的に証明する ISO/IEC 17025:2005 の認定を取得しました。国内外の関連機関からの診断依頼に対する確定診断の実施や国際標準診断法の提供などを行い、世界中の動物原虫病の監視・制御に貢献しています。



獣医・畜産領域で日本唯一の原虫病総合研究施設



セミナー風景



モンゴルにおける原虫病研究センターのOB/OG研究集会



スリランカで発見した新たな病原性ウシバベシア



十勝地方に生息するヤマトマダニ



ウガンダにおけるフィールド調査の風景

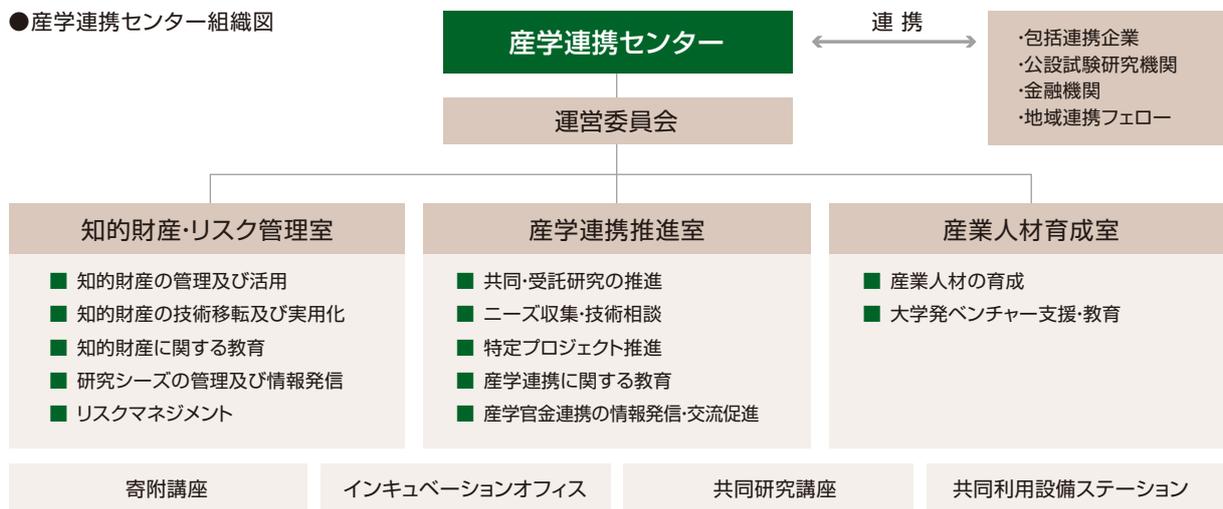
産学連携センター

産学連携センターは、平成8年に学内共同教育研究施設として設立された地域共同研究センターを発祥としており、その後、センター外の組織の統合や新設を経て、現在は産学連携推進室、知的財産・リスク管理室、産業人材育成室の3室体制となっています。産学連携推進室は受託研究や共同研究の実施支援、競争的資金獲得支援、技術相談窓口を担当し、社会と大学を繋ぐことで、大学の研究成果を社会へ還元する中心的な役割を果たしています。また、令和4年度、北見工業大学、小樽商科大学との経営統合を見据え、農商工の分野融合研究を加速させるため、オープンイノベーション促進共同研究予算を措置して三大学の研究交流の促進に取り組んでおります。知的財産・リスク管理室では知的財産の権利化と管理及びその活用、学内研究者が直面する多様なリスクを回避すべく研究者の支援を担当しています。産業人材育成室では、帯広市との連携による「フードバレーとかち人材育成事業」の実施及び事業運営事務を統括しています。

平成25年に改修したインキュベーションオフィスには、令和2年度に新たに3社が加わり、共同研究等を実施している企業13社が入居しております。これらの企業とは、講義・実習担当講師としての派遣、本学学生のインターンシップ受入、本学大学院への社員の社会人入学などの交流が行われ、様々な成果が生まれつつあります。

また、令和3年3月には新たに企業等集積プラットフォームを設置しました。このプラットフォームでは、研究シーズ等の大学の情報発信や企業間のコーディネートによって好循環を生む産学連携活動を展開していきます。

●産学連携センター組織図



産学官金連携交流会miniの様子



株式会社満寿屋商店との共同研究で開発された「炊き種®」製パン法のとろ〜りチーズパン

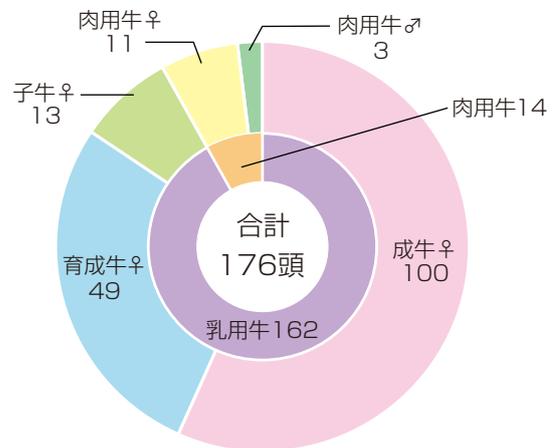
畜産フィールド科学センター

畜産フィールド科学センターは、162頭の乳牛と14頭の肉牛を飼育し、138.5haの耕地で粗飼料を完全自給すると共に輸入穀物に代わる濃厚飼料として実取りトウモロコシを栽培・利用する「資源循環型酪農」に取り組んでいる酪農場で、農畜産・獣医臨床に関する実習教育・試験研究及び地域社会への普及・体験教育活動を展開しています。学生教育では理論と実務を統合化した実践的教育を、研究活動では牛の飼養管理・疾病、飼料生産などに関する幅広い実証的応用研究者を、そして地域貢献活動として、小学生を対象とした体験学習から獣医師・家畜人工授精師を対象とした社会人の卒後教育も行っています。また、センターに設置されている「家畜・植物防疫研究室」では、畜産現場における家畜及び植物防疫の研究を推進しながらキャンパス全体の防疫について情報発信しています。平成26年度には乳製品工場がFSSC22000の認証を、令和元年度には搾乳施設と牛舎がISO22000の認証の資格を取得し、センターで生産される製品等について、食品安全マネジメントの構築と運用を行っています。

●土地面積(ha) (令和3年5月1日現在)



●家畜頭数(頭) (令和3年5月1日現在)



ふれあい牧場
親子体験学習



1番牧草収穫作業



畜産フィールド科学センター入り口



FSSC22000認証取得
工場で製造される畜大牛乳と
畜大牛乳アイスクリーム



ISO22000認証
取得搾乳施設
(うしぶ。の搾乳風景)

動物医療センター

動物医療センターでは、センター教職員の他、獣医学研究部門、グローバルアグロメディシン研究センター、原虫病研究センター及び畜産フィールド科学センターなどの教員から成る3つの診療科(伴侶動物、産業動物、診断検査)を置いて、一般外来の動物診療以外にも、動物の精密検査・特殊診断・治療に取り組んでいます。同時に、『教育病院』としての学部学生・大学院生への実践的(参加型)臨床実習教育の場であり、更には『研究施設』としての臨床学術研究の場ともなっています。その他に、地域臨床獣医師のための『二次診療基幹病院』や『生涯教育の提供機関』としての役割を担っています。

診療活動においては、高度獣医療提供のための設備等充実がなされた診療施設であることは言うまでもありませんが、他大学と比較して産業動物(大動物)の占める割合がきわめて高いのも特徴の1つであり、取扱う動物の診療頭数は下表のとおりとなっています。

●診療頭数実績(頭)

(令和2年度)

区分	伴侶動物(小動物)				産業動物(大動物)				計
	犬	猫	その他	小計	馬	牛	その他	小計	
診療頭数	2,758	635	0	3,393	2,288	5,298	95	7,681	11,074



伴侶動物手術



MRI装置



馬のCT検査



馬の喉頭形成手術



臨床繁殖検査



牛の巡回診療

産業動物総合画像診断システム導入

1号車のショートボディ車両は、X線透視装置や超音波画像診断装置等の大型機器を搭載しており、高度画像診断、超音波診断等を行い、それを基に治療、手術ができる「移動型診療室」として整備しました。また、2号車のロングボディ車両は、血液検査機器、クリーンベンチを備え1号車での診断を基に、更に詳細な病原体検査、遺伝子検査を行うことで病気を確定する他、内視鏡下人工授精・受精卵移植等最先端の生殖医療が行える「移動型検査室」として整備しました。2台で往診することで、遠隔地での迅速な高度診療が可能になりました。



動物・食品検査診断センター

近年、腸管出血性大腸菌 O157 や鳥インフルエンザをはじめとする新興・再興感染症、人獣共通感染症、大規模食中毒、食品偽装など「食」の安心と安全を脅かす深刻な問題が次々に発生しています。このような食の安全性を巡る危機的状況は、今日の獣医学教育・研究の動向に少なからぬ影響を与えており、本学においても、これらの問題の解決のために地域的特性や専門性に依拠した新たな検査診断の実施、並びに教育の拠点形成のために平成 26 年に動物・食品検査診断センターを立ち上げました。



本センターは我が国初となる獣医大学の動物・食品検査診断センターであり、ISO/IEC17025 認定を平成 29 年に取得し、正確な測定 / 校正結果を生み出す能力において厳しい審査基準に適合し認定を受けた試験機関です。その設置目的は“農場から食卓まで”の食の安全性を確保するために、家畜や食品の検査診断を行い動物衛生と食品衛生に寄与することで社会に貢献することです。即ち、本センターは畜産物の生産から流通・消費に至る過程で発生する、または発生が予想される種々の問題に対処し、食の安全性確保に資する検査診断と当該分野の教育の拠点です。教育では特に高度専門職業人育成に貢献します。検査診断では、様々な動物感染症に対する検査や食品検査を中心に行い、更に教育では学部教育・大学院教育・卒後教育・社会人教育を行います。

検査診断分野(4分野)

本センターは、①食品有害微生物分野、②毒性解析分野、③食品リスク分野、④新興再興感染症分野の4つの検査診断分野で構成されています。



細菌検査(培養検査)



ウイルス検査(遺伝子検査)



微生物検査室

附属図書館

図書館資料を体系的に収集・整理・保存し、その利用奉仕につとめ、広く学術文化の向上に寄与することを目的としています。また、高度情報化社会、かつ、多種多様な知的要求に応ずることができるよう図書館のネットワーク化、電子図書館化など大学図書館として対応できるよう努力しています。

資料数

(令和3年3月31日現在)

●図書冊数

和書	170,056
洋書	49,088
計	219,144

●雑誌種類数

和雑誌	4,905
洋雑誌	1,279
計	6,184

●視聴覚資料数

DVD・BDビデオ テープなど	2,525
--------------------	-------

●電子ジャーナルタイトル

Elsevier Science Direct	Springer LINK
Wiley Online Library	Science
Journal of Animal Science	Nature
BioOne	Veterinary Record
American Chemical Society (ACS)	
Proceedings of the National Academy of Sciences of the U.S.A. (PNAS)	
ルーラル電子図書館	

利用状況

(令和2年度)

入館者	図書貸出冊数	レファレンスサービス	文献複写依頼件数	文献複写受付件数	文献複写海外依頼件数	帯広市図書館 市民文庫 貸出冊数
25,716人 (1日平均99人)	14,797冊 (1日平均57冊)	303件	412件	189件	0件	254冊



ラーニング・commons



閲覧スペース

保健管理センター

保健管理センターは、学生・職員の保健管理に関する専門的業務を行う組織で、健康増進・保持と疾病予防に向けた取り組みを行っています。センターでは専任の医師と看護師等が常駐して急病者に対する処置・投薬などのプライマリケアを行い、必要時には市内の医療機関と連携して治療にあたります。また、嘱託の精神科医や、カウンセラーによるメンタル相談を定期的に行っています。



|| イングリッシュ・リソース・センター

イングリッシュ・リソース・センターは、英語教員が中心となって運営する組織で、英語教育の積極的な推進、及び大学の管理運営における英語関連の支援に取り組んでいます。

英語教育推進の観点からは、①英語の各授業と連動するリーディング教材の貸し出し、②学生・教職員が集って昼食と会話を楽しむイングリッシュ・ランチの実施、③学生が自身の海外体験を英語で発表するトラベログの開催、などを行っています。

また、大学の管理運営における支援としては、①学生・教員が執筆する英語論文の校正、②学内の各事務組織が作成する英語版文書のチェック、などを担当しています。



英語教材の貸出

|| 農学情報基盤センター

農学情報基盤センターは、「情報処理」についての教育、研究の中心的役割を担っており学内ネットワークシステムの拠点でもあります。ウィルス対策ソフトウェアを全学に無償配布し、また、ネットワーク監視ツールを導入するなど、学内ネットワーク環境の安全かつ安定的な運用を行っています。マイクロソフトと包括ライセンス契約を結んでおり、教職員や学生が自由にオフィス製品の利用やOSのバージョンアップを行えます。スパムメール対策としてセキュアMXを導入し、教職員にとって快適なメール環境を実現しています。

更に事務系の業務サーバを農学情報基盤センターで一元管理し、安全性の確保、運用の効率化を実現しています。



コンピュータ実習

|| 大学情報分析室

大学情報分析室は、大学業務に係る各種情報の収集及び分析を行い、本学の教育、研究、国際、社会貢献活動及び管理業務の支援や大学運営の改善・強化を推進するための業務を行っています。

|| 実験動物施設管理室

実験動物施設管理室は、学内の動物飼育室・動物実験室の一元管理を目的として設置した共同利用施設で、平成23年には、農学系としては初めて、国立大学法人動物実験施設協議会の会員施設として認められました。

動物実験を取り巻く環境あるいは行政の変化を適切に捉えながら、実験動物施設、そこに飼育されている動物の適正な管理・運営及び施設利用者に対する実験・研究サポートを実施しています。



実験動物舎I

国際活動

帯広畜産大学は、中期目標に、知の創造と実践によって実学の学風を発展させ、「食を支え、くらしを守る」人材の育成を通じて地域及び国際社会へ貢献することを大学のミッションとして掲げ、獣医・農畜産学分野の教育研究を通じて人類の健康と国際社会の平和に貢献するため、海外大学、国際機関、国際協力機関との連携事業を充実するとともに、留学交流を推進しています。

国際協力

本学では、獣医・農畜産学分野での実学研究の成果を還元し、国際社会の持続的発展に資するため、独立行政法人国際協力機構<JICA>が実施する「技術協力プロジェクト」や「草の根技術協力」、またJICAと独立行政法人科学技術振興機構<JST>及び日本医療研究機構<AMED>が共同で行う事業「地球規模課題対応国際科学技術協力」<SATREPS>等に参画し、専門家として本学教員を発展途上国に派遣しています。令和2年3月末までにJICA専門家として派遣した本学教員等は352名、JICAからの委託に基づき、開発途上国の研究者、技術者等を研修員として受け入れたのは、87カ国771名です。

※令和2年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、専門家派遣、研修員の受け入れは行っておりませんが、ビデオ会議システムを利用した研修プログラムを実施し、16名の研修員が受講しました。

■専門家の派遣

パラグアイ共和国

東部地域・酪農振興のための農業研究拠点の形成と人材育成支援
平成28年7月～令和3年6月
(草の根技術協力事業)

平成23年6月から平成28年6月まで実施した「東端畑作地域・酪農技術向上支援」事業で課題となった技術者の知識向上と、酪農家を指導できる体制整備に焦点を当て、平成28年7月から開始しました。本事業では前事業の成果及びデモンストレーション農場を活用し、酪農技術研修拠点の強化を目指しています。当初は、昨年9月末に終了予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、現地での活動がストップし、現在は、ビデオ会議システムを利用し、遠隔支援を行っています。本事業は、今年6月で終了しますが、すでに後継プロジェクト「酪農の持続可能な発展をめざすネットワークを活用した酪農家支援体制構築プロジェクト」が採択されていることから、引き続き、支援を継続していきます。



ウガンダ共和国

マダニ媒介感染症制御による畜産農家支援
令和2年3月～令和6年3月
(草の根技術協力事業)

ウガンダの畜産農家の多くは、マダニ吸血による直接的な被害及びマダニ媒介感染症による家畜の健康状態悪化に直面しています。薬剤抵抗性マダニの出現などにより、殺ダニ剤によるマダニ駆除も十分な効果が得られず、薬代出費が家計を圧迫するなどの課題も生じています。

本事業は、薬剤抵抗性マダニの特定、有効な薬剤の提示及び畜産農家や獣医師に対するマダニ対策プログラム実施を通して、マダニによる家畜への被害を減少させ、畜産農家の生産性向上を目指しています。



■研修員の受入れ

※令和2年度は、ビデオ会議システムを利用し、研修プログラムの一部を実施しました。

バリューチェーンの整備を通じた農村振興

本コースでは生産現場と消費者を結ぶバリューチェーン、特に高度な知識や技術、組織化が必要とされるミルクチェーンの構築を縦軸に、地域における耕畜連携や資源の有効利用、農村と都会の交流を通じた食の安心・安全や農業への理解を深める取り組みの紹介を横軸に、包括的な農村計画を立案、構築できる能力の涵養を目指して実施しています。



家畜感染症対策(原虫病含む)研究者育成

動物からヒトに伝染する人獣共通感染症対策のための効果的な診断、治療、予防方法などについて、講義や実習を通じ習得する他、大学教員の指導を受けながら研究の基本を習得するために実践的な研修を行い、自国の問題を提議できるように基礎知識を身に付けることを目指して実施しています。

国際協力人材の育成

本学では、農場から食卓までの幅広い領域を学際的視点で捉える能力、あらゆる現場に適応できる知識・実践力、地球規模課題解決等の国際的視野を備えたグローバル人材を育成するため、学内における獣医・農畜産融合の実践的教育プログラムのほか、JICAとの連携による国際協力経験機会や海外協定締結大学への留学など様々な学生海外派遣プログラムを提供しています。

■学生の海外派遣機会の提供

青年海外協力隊による学生海外派遣

本学ではこれまで、在学生・卒業生合わせて、300名以上のJICA青年海外協力隊員を輩出しています。平成17年度から平成20年度にかけては、JICAの「フィリピン酪農開発強化プロジェクト」に短期隊員として、合計32名の学生をフィリピンに派遣し、酪農に関する育種・繁殖・衛生管理・濃厚飼料等の分野の技術支援を行いました。



平成24年度からは「帯広-JICA協力隊連携事業」を開始し、南米パラグアイ共和国において酪農技術向上の支援を行っています。活動期間が2年の長期、1.5ヶ月間の短期を組み合わせたボランティア派遣事業を協同で行い、令和2年3月末までに68名(長期隊員16名、短期隊員52名)の学生・卒業生を派遣しました。隊員は、乳質の改善や飼料改善など様々な活動に従事しており、パラグアイ側、日本側双方から高い評価を得ています。

なお、派遣者は、学内で公募・選抜し(長期派遣は卒業生を含む)、在学生は授業科目「海外フィールドワーク」の単位を取得できます。

国際共同研究推進のための大学院生派遣プログラム

本学では、獣医・農畜産分野の世界レベルの研究実績による国際研究協力を強化するため、平成27年4月にグローバルアグロメディシン研究センターを設置し、米国コーネル大学および米国ウィスコンシン大学と、獣医・農畜産分野の国際共同研究、招聘外国人教員の学生教育への参加、米国大学で実践される特色ある教育プログラムの導入を推進しています。その一環として、コーネル大学またはウィスコンシン大学に大学院生を派遣し、本学との間で行われている国際共同研究に参画することにより、世界トップレベルの研究機関における研究活動の機会を提供するものです。



そのため、海外の大学で単に講義を受講するといった留学ではなく、本学および派遣先教員の指導の下、両大学が進めている国際共同研究の一部を担う大学院生の海外派遣を実施しています。

海外協定締結大学への留学

本学では、学生交流協定を締結している外国の大学に学生を派遣する短期留学制度を実施しています。対象となる学生は、留学時において学部3年次以上(獣医学課程は5年次以上)又は大学院生で、派遣期間は3ヶ月以上1年以内です。

留学先の大学において取得した単位は、本学の大学教育センターで審査の上、卒業又は修了要件単位として認定されます。また、留学先大学における授業料は免除されます。

■海外の学生との交流

サマージョイントプログラム

平成30年度から、ウィスコンシン大学の学生と共に学ぶ「サマージョイントプログラム」を開講しています。このプログラムは、帯広畜産大学、ウィスコンシン大学の学生がチームとなることで行われます。学生は相互にコミュニケーションを図りながら、グループディスカッションやプレゼンテーション、フィールドワークを通じて、北海道の自然、食の生産から加工までについて学びを深めます。



1週間程度の短期間ではありますが、異文化適応能力や英語によるコミュニケーション能力の育成を図る内容であり、グローバルな視野をもって社会で活躍したいと思っている学生にとっては、非常に有意義なプログラムとなっています。

■入試制度

国際協力 特別選抜制度 (平成18年～)	大学院畜産学研究科において、青年海外協力隊等の海外ボランティア活動や国際協力実務経験者を対象とした学生募集を行っています。本制度により入学した学生には、授業料相当額(月額5万円)の奨学金を貸与し、課程修了後に国際協力関係の業務に従事した場合には、貸与した奨学金の返還を免除することとしています。
-------------------------------------	---

■学際教育プログラム(平成30年度入学者以降)

国際教育プログラム (International Studies Program)	現代社会では、農業や食料に関わる様々な職場において国際事情、諸外国との関係、外国人との交流等を重要視しなければなりません。また、農学、畜産科学、獣医学は地球規模課題である食料安全保障、環境問題、エネルギー問題、感染症等と密接に関連します。本学畜産学部では、各専門ユニットの教育科目において国際的視野を醸成するための教育を実践しますが、更に、学部卒業後又は大学院進学・修了後速やかに国際舞台で活躍したいと考えている学生、組織の国際部門で活躍したいと考えている学生等を対象に、外国人との高いコミュニケーションスキルの習得や地球規模課題が顕著である開発途上国の獣医農畜産事情等を深く理解するために効果的な科目を履修するモデル「国際教育プログラム」を用意し、サポートする体制をつくっています。
大学院進学プログラム (Pre-Graduate Course Program)	本学大学院又は他大学大学院進学を目的として、英語科目を3年次後期までに履修した上で、本学大学院の指定する授業科目を4年次に履修することができるプログラムです。 英語科目は、5科目(10単位)をA ⁻ 以上、またはTOEICのスコア650以上を目指します。TOEICのスコア650以上(出願締切日から過去2年度以内に取得したものに限る。)であれば、本学大学院入学時の外国語の試験は免除されます。 また、上記の英語科目についての条件を3年次後期までにクリアした場合、大学院の授業科目を4年次に6単位を限度として履修できることとします。履修した科目の単位については、本学大学院入学後に、修了要件となる単位として認定できるものとします。
動物医科学コース 進学プログラム (Veterinary Life Science Program)	本学大学院畜産科学専攻博士前期課程「動物医科学コース」進学を目指す学生のためのプログラムです。 家畜を含めた動物一般の疾病やその診断・治療、また体の仕組みや調節機構をより詳しく知りたいと考える学生に対し、基礎生物学や農畜産学の基礎を学ぶことを目的としています。 英語科目は、5科目(10単位)をA ⁻ 以上、またはTOEICのスコア650以上を目指します。TOEICのスコア650以上(出願締切日から過去2年度以内に取得したものに限る。)であれば、本学大学院入学時の外国語の試験は免除されます。
スマート農畜産業 プログラム	スマート農業とは、ロボット技術やICT(情報通信事業)、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)等の先端技術を活用し、超省力化や生産物の品質向上を可能にする新しい農業のことを言います。日本の農業は、農業従事者の高齢化・後継者不足に伴う労働力不足をはじめ、耕作放棄地の増加や食料自給率の低下など、さまざまな問題を抱えており、スマート農業は日本農業が抱える課題を解決、成長産業化する試みであり、推進が急務とされています。本プログラムは、本学で開講している農学・畜産学の基本科目とベースに、ICT、AIおよびIoT等の農畜産学先端技術の実習科目を履修することにより、新たな農畜産業システムを考案・構築しうる人材を養成します。

社会貢献

地域研究機関による連携協力決議

事項名	スクラム十勝
目的・概要	十勝圏に存立する公設6研究機関が我が国の動植物性食品生産の中核である十勝地域が抱える食の安全と安心(生産と衛生)に関する多様な課題を解決並びに課題解決に資する高度な人材を育成し、十勝地域及び我が国並びに世界における食の安全及び安心の確立ひいては健全な食文化の構築に資するため、各研究機関等間における包括的な連携協力を推進するための枠組みを確立することを目的とする。
構成機関	国立大学法人帯広畜産大学 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター芽室研究拠点 地方独立行政法人北海道立総合研究機構畜産試験場 地方独立行政法人北海道立総合研究機構十勝農業試験場 公益財団法人とかち財団 独立行政法人家畜改良センター十勝牧場
決議年月日	2005.3.17

高大連携事業

平成17年3月に北海道帯広農業高等学校と、平成22年3月に北海道更別農業高等学校との連携に関する協定を締結しました。

大学と高校との垣根を越えた連携で、教員の相互派遣や生徒及び学生の実習受入のみならず、昨今重要視されているHACCPに関する学習支援や、サークル活動を通じた生徒と学生の交流など、様々な高大連携事業を展開しています。

帯広市との連携事業

平成17年6月に締結した包括連携協定に基づき、社会人の人材育成事業や学生と地域のつながりを強化する事業など、様々な地域貢献事業を積極的に展開しています。

帯広市とのフードバレーとかち人材育成事業

本事業では、地域の農業・食品関連産業の更なる事業展開を支える人材の育成、企業の発展に寄与する人材の育成を支援しています。令和3年度は、ビジネスコース、食品安全管理コース、農業生産者コース、農業経営者コースの4つのコースを設け実施します。更に修了生を対象に、アグリビジネスの事業化や課題解決を支援する個別のフォローアップ制度を設け、企業ニーズに対応した人材のスキルアップを行っています。令和2年度には、特別セミナーとして「AI活用セミナー入門編」を実施し、農業者、行政、農協の皆様等、多くの方々にご参加いただきました。



AI活用セミナー実施の様子

おびひろ動物園との連携協定

帯広畜産大学とおびひろ動物園は、相互に協力して動物に関する教育・研究の充実を目指すと共に、魅力ある動物園としての活性化を図ることを目的として、平成22年7月に連携協定を締結しました。これまで、インターンシップやヒツジの毛刈り作業の公開などの共同イベントのほか、学生参加による魅力的な動物園づくり事業の実施、また、おびひろ動物園内に「帯広畜産大学サテライトブース」を開設し骨格標本の展示を行うなどの連携事業を展開しています。



おびひろ動物園に設置されている「帯広畜産大学サテライト」

包括連携協定

一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団

文化やスポーツを通じた社会貢献や振興に寄与することを目的として、平成24年3月30日に一般財団法人帯広市文化スポーツ振興財団と連携協定を締結しました。この連携により、平成25年度から、本学の学生サークルが主体となり、スポーツ体験などを通じた市民との交流を行う「みんなのちくだい。」事業を実施しています。

※令和2年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、事業を中止しています。



「熱気球にふれてみよう!乗ってみよう!」

株式会社十勝毎日新聞社

大学と報道機関、それぞれの機能と強みを生かし、相互に充実した連携を行いながら、十勝地域における様々な課題や、特に基幹産業である農業の振興に関する研究・報道等を通じて社会に成果を還元し、地域の活性化への貢献をすると共に、住民の生活向上や学生の成長・発展に寄与することを目的として平成28年8月10日に株式会社十勝毎日新聞社と包括連携協定を締結しました。この協定に基づき、イベントの共催、講師派遣などを行っています。



イベント共催(リベラルアーツ講演会)

上川大雪酒造株式会社および十勝緑丘株式会社

「発酵・醸造」に係る現場レベルの実践的な教育研究の活性化を目的に、令和元年7月に連携協定を締結し、構内に上川大雪酒造株式会社の酒蔵「碧雲蔵」を設置しました。

令和2年度より、上川大雪酒造株式会社の総社氏による講義や酒蔵見学・実習の受け入れ、共同研究などを連携して行っています。



酒蔵「碧雲蔵」

東日本電信電話株式会社(NTT東日本)

持続可能なスマート農畜産業に関する教育研究の推進などを目的に令和2年10月にNTT東日本と連携協定を締結しました。

本学の農畜産実証フィールドにICTを導入し、「Farm to Table」におけるデータ収集・統合・分析を行う共同研究やICT人材育成、研究成果の社会実装に向けた企業間連携に取り組んでいます。



中村常務取締役と奥田学長

株式会社ロジネットジャパン

農業技術の伝承、生産力の維持拡大に向け、後継者の育成や効率的な農業経営モデルの構築を通して北海道農業の発展に寄与することを目的に、株式会社ロジネットジャパンと令和2年2月に連携・協力に関する協定を締結しました。

本学内に設置したLNJ実験圃場にてパレイショ生産体制の確立検証ならびにパレイショ生産に関する研究を実施しています。



実験圃場での作付けの様子

帯広商工会議所

十勝の地域産業が抱える課題解決および地域活性化に取り組むため、令和2年9月に帯広商工会議所と連携・協力に関する協定を締結しました。

本連携では、家畜糞尿による環境問題の解決に向け、バイオガスプラントから副産物として発生する余剰消化液の資源利用や無害化等についての研究を行う寄附講座を設置する予定です。

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)

北海道十勝におけるSociety 5.0の早期実現を図ることを目的に、平成31年4月に農研機構と連携・協力に関する協定を締結しました。

「北海道十勝発スマートフードチェーン・プロジェクト」において、育種・生産から加工・消費にわたるフードチェーンをAIとデータ連携によるスマート化によって食品の高付加価値化を図り、北海道十勝の農業・食品産業競争力の強化を目指す共同研究等を行っています。

よつ葉乳業株式会社

平成21年に包括連携協定を締結し、酪農や乳製品に関する共同研究および次世代の酪農家の育成を目的とする「帯広畜産大学デイリースクール」を開催しています。

敷島製パン株式会社

平成24年4月に包括連携協定を締結し、共同研究や社会人大学院生の受け入れを継続して行っています。製パン実験施設「とかち夢パン工房」は様々な教育研究に活用され、共同研究の成果が製品に活用されています。

カルビー株式会社

平成24年10月に締結した包括連携協定により、バレイショ栽培における施肥・土壌改良技術に関する共同研究を実施し、毎年3月にこの共同研究成果の発表会を行っています。

寄附講座

「バレイショ遺伝資源開発学講座」

この寄附講座は、将来にわたって安全・安心なバレイショを供給するため、生産者や加工メーカーが資金を出し合って平成25年4月に開設されました。バレイショの原産地であるアンデス地方では、疫病、ウイルス、センチュウなどの病害虫に強い在来品種が作られ、畑の周辺には野生バレイショが広がっています。これらの持つ優れた遺伝的特性をバレイショ品種に導入するために必要な技術開発と素材系統の育成を行っています。



野生種の利用に関する研究

「生命平衡科学講座(白寿)」



マウスに電界を処置する研究設備

この寄附講座は、医療機器を製造販売する企業の株式会社白寿生科学研究所と平成24年11月より、生命が本来持つ生体機能を平衡に保つ働きについて総合的に研究し、予防医学の発展に繋げることを目的に設置されました。現在は、本講座で発見された超低周波電界のストレス軽減作用(マウス)を礎として、電界の効率的処置方法についての整理が進み、また、本研究から派生する形で、多様な疾患の原因となる炎症へ及ぼす作用の研究へと発展を見せています。更には、当講座が開発に参画した眼には見えない電界を可視化する技術(方法)は日本及び中国、台湾で特許として成立し、当講座の成果の社会実装が着実に進んでいます。

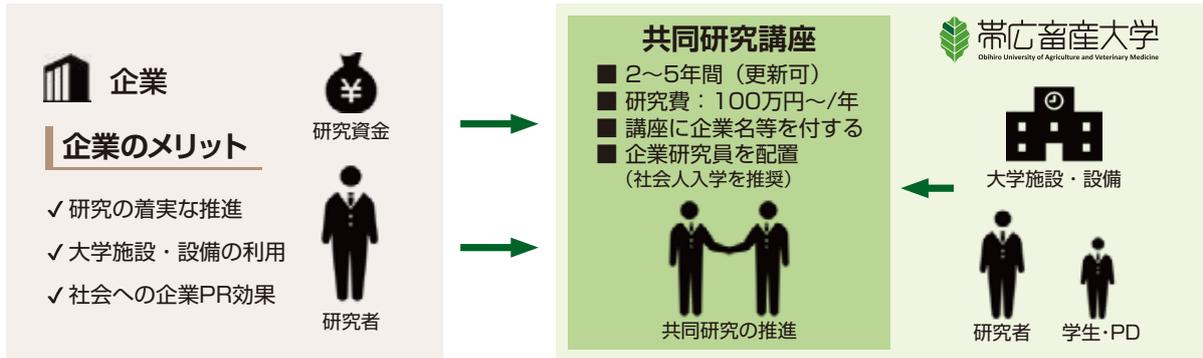
共同研究講座

企業から受け入れた資金により、大学内に講座を設置し、教員と企業が対等な立場で共通の課題を共同して研究を行うものです。

大学内に研究組織として開設し、企業から研究者を受け入れることにより、研究の効率化や優れた研究成果の創出を図ることができます。



設置第1号「Pasco未来パン共同研究講座」



令和2年度社会貢献事業

事業名	内容	件数
学校教育等の支援	高大連携事業、出前授業など	50
社会人学習の支援	フードバレーとかち人材育成事業、生産獣医療技術研修、農業共生圏高度専門家育成事業など	97
生涯学習の支援	市民開放授業、市民大学講座など	31
行政機関の委員等への就任	国、地方公共団体、その他団体の委員など	204

※令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、令和元年度に比べ件数が減少しています。事業はオンライン等を利用して実施しました。



障がい者乗馬体験事業※



畜大ふれあいフェスティバル※



畜大webフェスティバル
<https://www.obihiro.ac.jp/fureai-fes>



市民開放授業「とかち学」※

※令和元年度の実施写真です。



野生生物保全管理講習※



農業共生圏高度専門家育成事業による
環境教育コンテンツ
<https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity>

職員数

(令和3年5月1日現在)

区分	学 長	理 事	監 事	教授			准教授			講師			助教			教員計			事務・技術 職員			総合計		
				男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
役員	1	2 (1)	(2)													0			0			3 (2)	(1)	3 (3)
研究域				36	2	38	30	4	34	5	1	6	9	6	15	80	13	93			0	80	13	93
グローバルアグロ メディン研究センター				6		6	3		3	1		1	11		11	21	0	21			0	21	0	21
原虫病研究センター				6		6	2		2				1	1	8	1	9	1		1	9	1	10	
産学連携センター																0	1		1		1	0	1	
畜産フィールド 科学センター							2	1	3				1	1	2	2	4	6	3	9	8	5	13	
動物医療センター												1	1	2	1	1	2			0	1	1	2	
動物・食品検査 診断センター							1		1				1	1	1	1	2			0	1	1	2	
農学情報 基盤センター										2		2			2	0	2			0	2	0	2	
保健管理センター																0	1	1	2		1	1	2	
事務局																0	43	29	72		43	29	72	
化学物質等管理室																0	1		1		1	0	1	
監査室																0	1	2	3		1	2	3	
計	1	2 (1)	(2)	48	2	50	38	5	43	8	1	9	21	10	31	115	18	133	54	35	89	172 (2)	53 (1)	225 (3)

注:()は非常勤で外数

学生の定員・現員

●畜産学部

(令和3年5月1日現在)

学科・課程	入学定員		収容定員		現 員							
					1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	計	
共同獣医学課程	40		240		男	10	19	15	19	20	19	102
					女	30	21	27	19	26	20	143
					計	40	40	42	38	46	39	245
畜産科学課程	210 ※10		840 ※20		男	85	92(1)	76(1)	107(3)			360(5)
					女	127(1)	124(1)	154(1)	154(1)			559(4)
					計	212(1)	216(2)	230(2)	261(4)			919(9)
計	260		1,100		男	95	111(1)	91(1)	126(3)	20	19	462(5)
					女	157(1)	145(1)	181(1)	173(1)	26	20	702(4)
					計	252(1)	256(2)	272(2)	299(4)	46	39	1164(9)

※は第3年次編入学を示す

注:()内は内数で外国人留学生を示す

共同獣医学課程については獣医学課程1名(男)を含む

●畜産学研究科

(令和3年5月1日現在)

課程	専攻		入学定員	収容定員	現 員														
					1年次			2年次			3年次			4年次			計		
					男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
博士課程	畜産科学専攻	前期課程	48	96	25(3)	39(3)	64(6)	26(4)	28(3)	54(7)	-	-	-	-	-	-	51(7)	67(6)	118(13)
		後期課程	10	30	7(5)	4(2)	11(7)	4(1)	3(2)	7(3)	8(4)	1	9(4)	-	-	-	19(10)	8(4)	27(14)
	獣医学専攻		5	20	2	7(5)	9(5)	5(5)	4(4)	9(9)	3(2)	5(4)	8(6)	2(1)	-	2(1)	12(8)	16(13)	28(21)
計			63	146	34(8)	50(10)	84(18)	35(10)	35(9)	70(19)	11(6)	6(4)	17(10)	2(1)	-	2(1)	82(25)	91(23)	173(48)

注:()内は内数で外国人留学生を示す

●連合獣医学研究科(博士課程)・連合農学研究科(博士課程)

(令和3年5月1日現在)

	現 員				
	1年次	2年次	3年次	4年次	計
岐阜連大大学院生	-	-	-	2	2
岩手連大大学院生	-	-	1	-	1

●別 科

(令和3年5月1日現在)

専 修	入学定員	収容定員	現 員								
			1年次			2年次			計		
			男	女	計	男	女	計	男	女	計
草地畜産専修	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	1
酪農専修	15	30	6	3	9	8	2	10	14	5	19

外国人留学生

(令和3年5月1日現在)

区分	博士			修士			学部			研究生			特別聴講学生			総合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
イ ラ ン	1	1	2			0			0			0			0	1	1	2
インドネシア			0			0			0		1	1			0		1	1
ウズベキスタン			0			0			0	1		1			0	1		1
エジプト	2	2	4		1	1			0			0			0	2	3	5
大韓民国	1		1			0	1	1	2	1		1			0	3	1	4
ガ ー ナ	1		1	1		1			0			0			0	2		2
ガンビア	1		1			0			0			0			0	1		1
ケニア	1		1	1		1			0			0			0	2		2
ザンビア		1	1			0			0			0			0		1	1
ジンバブエ	1		1			0			0			0			0	1		1
スリランカ	3		3		1	1			0			0			0	3	1	4
タイ		2	2		1	1			0			0			0		3	3
台湾	1		1			0		2	2			0			0	1	2	3
チャド			0	1		1			0			0			0	1		1
中華人民共和国	2	2	4	2	2	4	4	1	5	3	1	4			0	11	6	17
ト ン ガ			0			0			0	1		1			0	1		1
パキスタン		1	1			0			0			0			0		1	1
パラグアイ		1	1			0			0			0			0		1	1
バングラデシュ		2	2	1		1			0			0			0	1	2	3
フィリピン		1	1			0			0			0			0		1	1
ベトナム	1	1	2			0			0			0			0	1	1	2
マダガスカル			0		1	1			0			0			0		1	1
マラウイ	1	1	2			0			0			0			0	1	1	2
モザンビーク			0	1		1			0			0			0	1		1
モロッコ		1	1			0			0			0			0		1	1
モンゴル	2	1	3			0			0			0			0	2	1	3
ラオス		1	1			0			0			0			0		1	1
総 計	18	18	36	7	6	13	5	4	9	6	2	8			0	36	30	66

●国費・私費別一覧

(令和3年5月1日現在)

区分	博士			修士			学部			研究生			特別聴講学生			合計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
国 費	8	6	14		1	1			0		1	1			0	8	8	16
私 費	10	12	22	7	5	12	5	4	9	6	1	7			0	28	22	50
総 計	18	18	36	7	6	13	5	4	9	6	2	8	0	0	0	36	30	66

国際交流協定締結大学

締結大学	締結年月
アルバータ大学(カナダ)	1985. 8
アスンシオン大学(パラグアイ)	1986. 4
フィリピン大学ロスバニオス校(フィリピン)	1991. 9
忠南大学校獣医科大学(大韓民国)	1993. 1
ミュンヘン大学(ドイツ)	1994. 7
ソウル大学校 農業生命科学大学及び獣医科大学(大韓民国)	1996.10
ペラデニヤ大学農学部(スリランカ)	1996.11
建国大学校(大韓民国)	1996.12
江原大学校(大韓民国)	1997. 8
新疆農業大学(中華人民共和国)	1999. 7
モンゴル国立農業大学(モンゴル科学生命大学)(モンゴル)	2003.10
フエ大学(ベトナム)	2005. 1
ベツトスイス連合獣医学部(ベルン大学獣医学部)(スイス)	2005. 6
マヒドン大学(タイ)	2005. 7
ハノーバー獣医科大学(ドイツ)	2007.10
ボゴール農業大学(インドネシア)	2009.12
中国黒龍江省農業科学院(中華人民共和国)	2010. 8
国立屏東科技大学(台湾)	2010. 8
チェンマイ大学(タイ)	2012.12
コーネル大学(アメリカ合衆国)	2013.12
ウィスコンシン大学(アメリカ合衆国)	2014. 9
ヴァルミア・マズーリイ大学(ポーランド)	2017. 9
ポーランド科学アカデミー(ポーランド)	2017. 9
リエージュ大学(ベルギー)	2018.12
チュラロンコン大学(タイ)	2019. 2

●原虫病研究センターとの部局間学術交流協定

締結大学	締結年月
フィリピン大学マニラ校公衆衛生学部(フィリピン)	2008.11
中国農業科学院上海獣医学研究所(中華人民共和国)	2010. 9
延辺大学(中華人民共和国)	2011. 9
マケレレ大学(ウガンダ)	2015.12
ワガドゥーグー大学(ブルキナファソ)	2016. 6
マンスーラ大学(エジプト)	2017. 2
ノースウェスト大学(南アフリカ)	2017. 6
中国青海獣医学研究所(中華人民共和国)	2017.11
国際湿地帯畜産研究開発センター(ブルキナファソ)	2018. 1
セブ工科大学(フィリピン)	2018. 5
モンゴル獣医学研究所(モンゴル)	2019. 6
フィリピンカラバオセンター(フィリピン)	2019. 7
スリランカ動物生産健康局(スリランカ)	2019. 7
カビテ州立大学(フィリピン)	2019.10

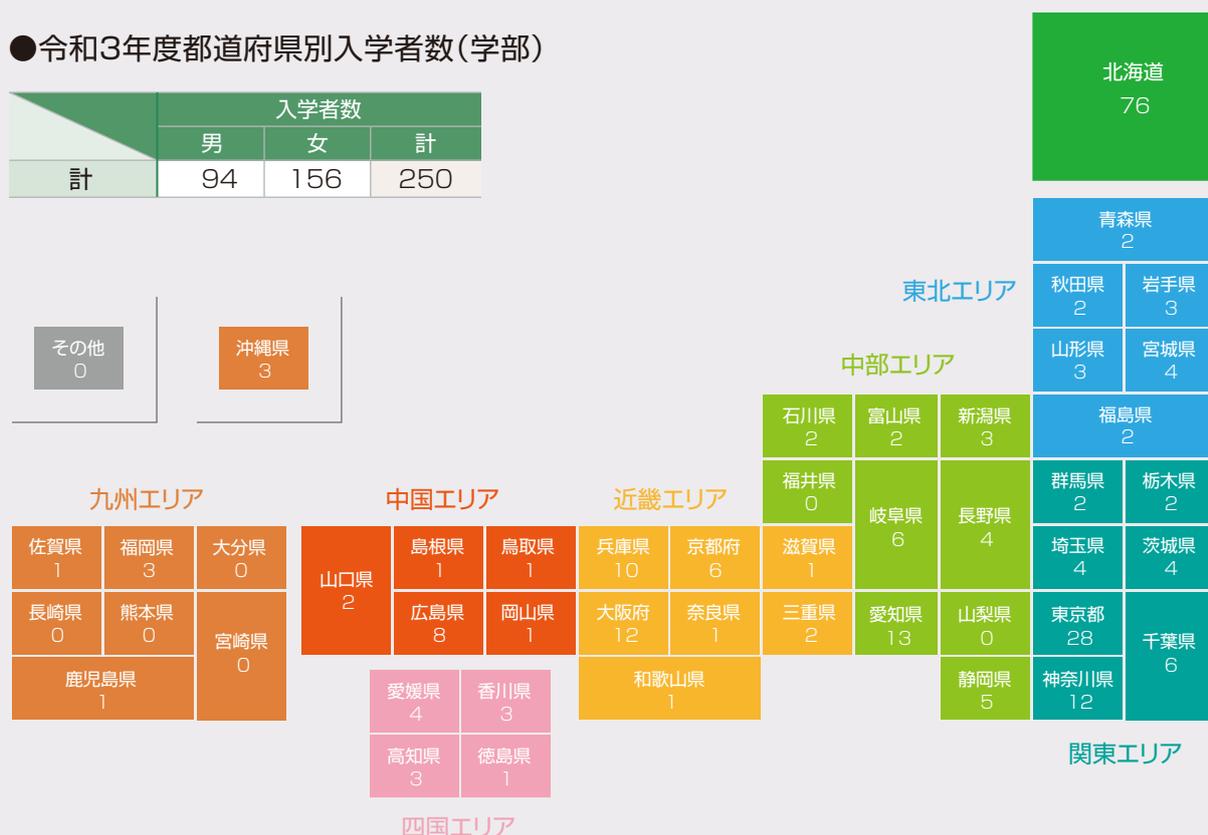
入学者数

●令和3年度入学志願者及び入学者数

課程名	区分	募集人員	志願者数			志願倍率	入学者数		
			男	女	計		男	女	計
共同獣医学課程	前期日程	30	51	93	144	4.8	8	21	29
	後期日程	10	35	67	102	10.2	2	9	11
小計		40	86	160	246	6.2	10	30	40
畜産科学課程	前期日程	130	112	147	259	2.0	61	72	133
	後期日程	25	57	102	159	6.4	8	14	22
	学校推薦型選抜(A推薦)	15	6	12	18	1.2	5	10	15
	学校推薦型選抜(B推薦)	40	19	45	64	1.6	10	30	40
	社会人	若干人	0	1	1	-	0	0	0
	帰国生	若干人	1	0	1	-	0	0	0
	私費外国人留学生	若干人	2	1	3	-	0	0	0
小計		210	197	308	505	2.4	84	126	210
合計		250	283	468	751	3.0	94	156	250
第3年次編入学(畜産科学課程)		10	14	7	21	2.1	7	3	10
別科 (酪農専修)	学校推薦型選抜	10	6	2	8	0.8	6	2	8
	一般選抜	5	0	2	2	0.4	0	1	1
	計	15	6	4	10	0.7	6	3	9
大学院畜産科学専攻博士前期課程		48	27	47	74	1.5	25	37	62
大学院畜産科学専攻博士後期課程		10	5	3	8	0.8	5	3	8
大学院獣医学専攻博士課程		5	2	4	6	1.2	2	4	6

●令和3年度都道府県別入学者数(学部)

	入学者数		
	男	女	計
計	94	156	250



卒業生及び修了者数

(令和3年5月1日現在)

学 科	昭和18年～ 25年度	昭和26年～ 令和元年度	令和2年度	合計
獣 医 科	104	—	—	104
獣 医 畜 産 科	492	—	—	492
専 修 科	3	—	—	3
酪 農 科	115	—	—	115
農 芸 化 学 科	140	—	—	140
農 学 科	56	—	—	56
計	910	—	—	910
獣 医 学 科		2,273	—	2,273
獣 医 学 課 程		162	—	162
共 同 獣 医 学 課 程		99	43	142
家 畜 生 産 科 学 科		660	—	660
酪 農 学 科		1,122	—	1,122
総 合 農 学 科		323	—	323
草 地 学 科		701	—	701
農 産 化 学 科		801	—	801
農 業 工 学 科		667	—	667
畜 産 経 営 学 科		319	—	319
畜 産 環 境 学 科		711	—	711
畜 産 管 理 学 科		828	—	828
畜 産 環 境 科 学 科		1,106	—	1,106
生 物 資 源 化 学 科		352	—	352
生 物 資 源 科 学 科		246	—	246
畜 産 科 学 科		1,236	—	1,236
畜 産 科 学 課 程		1,853	212	2,065
小 計		13,459	255	13,714
畜 産 学 専 攻 科		48	—	48
大学院(修士・博士前期課程)		2,182	41	2,223
大学院(博士後期課程)		99	13	112
別 科		1,248	18	1,266
計		17,036	327	17,363

注:昭和18年～昭和25年度は帯広高等獣医学校,帯広獣医畜産専門学校及び 帯広農業専門学校

就職状況

●卒業生の進路状況(学部)

(過去3年)

卒 業 年 度		平成30年度	令和元年度	令和2年度
卒 業 者		240	256	255
進 路 等	就 職 者	177	183	178
	進 学 者	40	51	60
	自 営 者	8	8	2
	そ の 他	15	14	15

●就職者の産業別分類

(過去3年)

産業別		卒業年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度
農 業			14	10	25
建 設 業			0	1	2
製 造 業	食料品・飼料等		40	42	34
	化 学 工 業		7	8	2
	機 械 等		1	4	1
	出 版 ・ 印 刷		2	0	1
	そ の 他		1	0	2
運 輸 ・ 通 信 業			0	3	3
卸 ・ 小 売 業			17	21	14
金 融 ・ 保 険 業			9	11	7
サ ー ビ ス 業	医 療 保 健 業		2	2	3
	教 育		3	6	3
	そ の 他		28	32	38
公 務 員			34	22	24
情 報 産 業			3	3	5
農 業 団 体			16	15	13
上 記 以 外			0	3	1
合 計			177	183	178

●令和2年度就職者の都道府県別就職先

都道府県名	就職者数	都道府県名	就職者数	都道府県名	就職者数
北 海 道	83	福 井 県	0	山 口 県	1
青 森 県	4	山 梨 県	1	徳 島 県	0
岩 手 県	2	長 野 県	5	香 川 県	0
宮 城 県	1	岐 阜 県	0	愛 媛 県	1
秋 田 県	0	静 岡 県	1	高 知 県	0
山 形 県	0	愛 知 県	4	福 岡 県	2
福 島 県	1	三 重 県	1	佐 賀 県	0
茨 城 県	4	滋 賀 県	0	長 崎 県	0
栃 木 県	1	京 都 府	0	熊 本 県	1
群 馬 県	0	大 阪 府	6	大 分 県	0
埼 玉 県	1	兵 庫 県	3	宮 崎 県	0
千 葉 県	4	奈 良 県	1	鹿 児 島 県	1
東 京 都	34	和 歌 山 県	0	沖 縄 県	0
神 奈 川 県	6	鳥 取 県	1	海 外	0
新 潟 県	2	島 根 県	0	合 計	178
富 山 県	0	岡 山 県	0		
石 川 県	3	広 島 県	3		

学生寮

(令和3年5月1日現在)

名称	収容対象	居室数(室)			収容定員			入居現員			建物延面積 (㎡)
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	
学生寄宿舎	学部・大学院修士・別科	144	158	302	144	158	302	125	137	262	5,366

国際交流会館

国際交流会館 I	タイプ	タイプ別基準面積 建物延面積(㎡)	部屋数	国際交流会館 II	タイプ	タイプ別基準面積 建物延面積(㎡)	部屋数
	A	12.4	8		A	9.7	2
B	28.0	13	B	14.5	6		
C	41.3	8	C	17.7	2		
			D	19.7	3		
			E	23.7	2		

福利厚生施設

施設名	面積(㎡)	備考
学生食堂	667	333席
購買部	589	書籍,文房具,日用雑貨,旅行事業等
かしわプラザ	1,346	マルチルーム,コミュニケーションホール等
逍遥舎	130	ホール,屋外デッキ等

日本学生支援機構奨学生

(令和2年度実績)

種別	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	計
大学給付奨学生	19	21	26	25	2	3	96
大学第一種奨学生	35	45	53	53	6	14	206
大学第二種奨学生	42	40	32	36	4	8	162
大学院第一種奨学生	11	11	0	-	-	-	22
大学院第二種奨学生	0	1	0	-	-	-	1

その他の奨学金

(令和2年度実績)

財団等	日本学生支援機構以外の奨学金	受給者数
	一般財団法人東和食品研究振興会森記念奨学金, 公益財団法人中董奨学会, あしなが育英会, 公益財団法人森下仁丹奨学金, 札幌市奨学生, 長崎県獣医学修学資金, JEES・JRA獣医学奨学金	11
財団等	外国人留学生に対する奨学金	受給者数
	公益財団法人ロータリー米山奨学会奨学金, 公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター北海道外国人留学生国際交流支援事業助成金, 文部科学省外国人留学生学習奨励費, 一般財団法人共立国際交流奨学財団奨学金, 公益財団法人日本台湾交流協会, 公益財団法人平和中島財団, 日本学術振興会	19

帯広畜産大学独自の奨学金

(令和2年度実績)

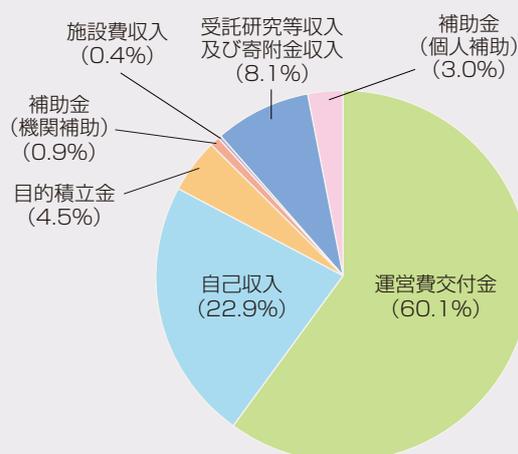
日本人	帯広畜産大学基金奨学金	受給者数
	帯広畜産大学大学院畜産学研究科日本人学生特別奨学金	19
外国人	帯広畜産大学博士後期課程外国人留学生特別支援制度	6
	帯広畜産大学大学院畜産学研究科博士課程及び博士後期課程特別支援制度(学内進学成績優秀者対象)	5
	帯広畜産大学大学院畜産学研究科博士課程及び博士後期課程特別支援制度(渡日前入試受験者対象)	3
	帯広畜産大学大学院畜産学研究科博士課程及び博士後期課程特別支援制度(渡日前入試受験者対象)	1

令和3年度収入・支出予算(収支区分別)

●収入

(単位:百万円)

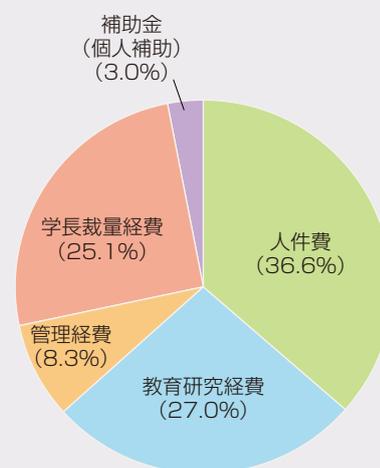
収入区分	予算額
運営費交付金	2,795
自己収入	1,066
目的積立金	211
補助金(機関補助)	41
施設費収入	20
受託研究等収入及び寄附金収入	377
補助金(個人補助)	141
合計	4,653



●支出

(単位:百万円)

支出区分	予算額
人件費	1,700
教育研究経費	1,255
管理経費	387
学長裁量経費	1,168
補助金(個人補助)	141
合計	4,653



※学長裁量経費には、人件費601百万円、

教育研究経費276百万円を含みます。

※端数処理の関係上、合計と一致しないことがあります。

科学研究費補助金等

(令和3年5月1日現在)

研究種目	年度	令和元年度		令和2年度		令和3年度	
		採択件数	交付額(千円)	採択件数	交付額(千円)	採択件数	交付額(千円)
新学術領域		2	4,940	0	0	0	0
基盤研究	A	0	0	0	0	0	0
	B	11	60,060	11	58,110	9	42,640
	C ^{注1}	37	50,180	37	44,070	40	56,940
挑戦的研究 ^{注2}	開拓	0	0	0	0	0	0
	萌芽	3	8,710	3	7,150	2	3,900
挑戦的萌芽研究 ^{注3}		—	—	—	—	—	—
若手研究 ^{注4}	A	—	—	—	—	—	—
	B	2	1,040	—	—	—	—
若手研究 ^{注5}		12	21,190	14	20,670	12	16,250
国際共同研究強化 ^{注6}	A	0	0	0	0	0	0
	B	2	6,630	6	28,340	6	27,300
特別研究員奨励費 ^{注7}		8	8,500	8	8,480	4	4,260
合計		77	161,250	79	166,820	73	151,290

(注1)基盤研究(C)のうち特設分野研究の令和3年度の内定通知は現在未定

(注2)平成29年度から萌芽は挑戦的研究(開拓)と挑戦的研究(萌芽)に再編。令和3年度の挑戦的研究(開拓)と挑戦的研究(萌芽)の内定通知は現在未定。

(注3,4,6)数値は継続課題分のみ。

(注5)平成30年度から若手研究(A)の公募が停止され、若手研究(B)の名称が若手研究と改められた。

(注7)特別研究員奨励費のみ、間接経費を含まない。(PD,RPDは間接経費あり)

財団等からの受入れ状況

(令和2年度実績)

財 団 名	採択件数	金額(円)
一般社団法人日本競走馬協会	2	5,960,000
公益財団法人伊藤記念財団	2	2,700,000
公益財団法人大下財団法人	2	2,000,000
一般財団法人旗影会	2	2,000,000
公益財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成	2	1,260,000
一般財団法人ホワイトロック財団	1	4,000,000
公益財団法人北海道馬鈴しょ生産安定基金協会	1	3,956,000
公益財団法人エリザベス・アーノルド富士財団	1	3,000,000
公益財団法人内藤記念科学振興財団	1	3,000,000
公益財団法人日本豆類協会	1	2,000,000
公益財団法人自然保護助成基金	1	531,000
公益財団法人秋山生命科学振興財団	1	500,000
公益財団法人 森永奉仕会	1	500,000
公益財団法人栗林育英学術財団	1	300,000
計	19	31,707,000

外部資金受入額

種別	年度	平成30年度		令和元年度		令和2年度	
		件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
受託研究費		39	117,058	32	61,359	32	56,424
民間等との共同研究		173	76,932	166	90,197	175	138,247
奨学寄附金		85	93,522	90	110,163	79	93,591
合計		297	287,512	288	261,719	286	288,262

※継続契約・0円契約も全て含む

校地及び建物

区 分	校地(㎡)	建物		
		建面積(㎡)	延面積(㎡)	
事務局	429,184	979	1,749	
校舎 (事務室・教室・教員室・実験室・実験圃場・ 課外活動施設・その他管理関係施設等)		12,355	30,642	
講堂		968	1,067	
体育館		2,212	2,858	
かしわプラザ		1,115	1,346	
逍遙舎		130	130	
保健管理センター		268	268	
国際交流会館		771	2,175	
福利厚生施設		850	1,546	
講義棟図書館		2,332	4,783	
産業動物臨床施設群		6,825	8,724	
原虫病研究センター		1,282	3,118	
産学連携センター		786	1,347	
畜産フィールド科学センター		1,378,600	15,385	16,243
寄宿舎		12,490	1,751	5,362
運動場		65,025	—	—
合計		1,885,299	48,009	81,358

案内図

アクセスマップ



帯広駅から本学まで

●十勝バス

①大空団地線(系統番号70)

帯広駅バスターミナル9番 乗車

緑陽高校前 下車、大学正門まで徒歩約15分

- 所要時間/約30分
- 料金/420円 ●本数/1時間に2本(土日は1時間に1本)

②環状線北廻り(系統番号28)

帯広駅バスターミナル11番 乗車

畜産大学入口 下車、大学正門まで徒歩約10分

- 所要時間/約30分
- 料金/420円 ●本数/1日4本(平日のみ)

③畜大線(系統番号79)

帯広駅バスターミナル9番 乗車

畜産大学前 下車、大学正門まで徒歩約1分

- 所要時間/約30分
- 料金/420円 ●本数/1日2本(平日のみ)

●タクシー

- 所要時間/約20分 ●料金/約2,000円(約7km)

とち帯広空港から本学まで

●十勝バス

とち帯広空港～帯広駅前
●所要時間/約40分 ●料金/1,000円
～帯広駅前から上記バスで本学まで

●タクシー

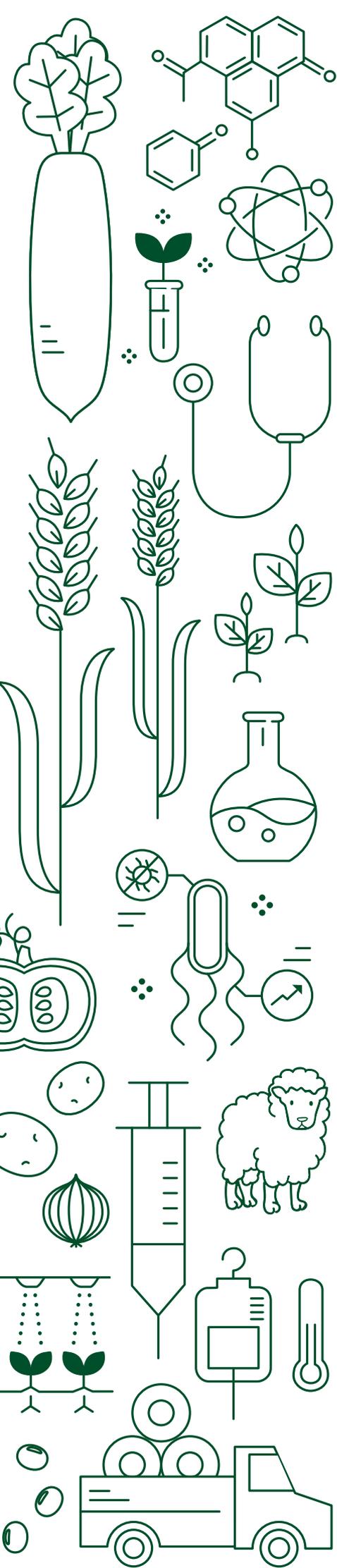
- 所要時間/約25分 ●料金/約5,500円(約21km)

バス停のご案内



配置図





発行 令和3年7月

編集発行 国立大学法人 帯広畜産大学 広報室
TEL.(0155)49-5216
〒080-8555
北海道帯広市稲田町西2線11番地
<https://www.obihiro.ac.jp>